もの言う魚の話

もの言う魚の話

むかし、欠築（市内東栄町）に、甚兵衛というお百姓がおったげな。

この甚兵衛は魚とりが大すきで、とってもじょうずやった。

きょうも、畑仕事をはやめにしまった甚兵衛は、いつものように、家の近くの土岐川の淵で魚釣りをしておった。

その日は、ふしぎなことに釣り名人といわれた甚兵衛のはりに、一ぴきの魚もかかってはこなんだ。

「川じゅうの魚が、どこかにいってしまった。きょうは、さっぱりや。」

と、あきらめた甚兵衛が家に帰ろうとしたとき、とほうもないどでかな鯉がかかった。

いっとき（二時間）近くも、あれや、これやとなんぎして、やっとのことでその鯉を釣りあげたが、あまりにも大きいので甚兵衛もおどろいた。

どうして家に持ち帰ろうかと、しあんしたが、とにかく、背なかに負んで川原を歩き出した。

鯉の尾ひれが、地面をざあ、ざあとすって音をたてるほどやった。

こうして甚兵衛が川原から堤に上がったそのとき、川の中から、

「やすやあ」

とよぶ大きな声がした。すると背なかに負ばれた鯉が、

「おうい」

とまけずに大きな声で返事をした。

負んだ鯉が声を出して返事をしたので甚兵衛は、びっくりして魚を放り出し、こしをぬかさんばかりに逃げ帰った。

それから何日かたったある日、甚兵衛が釣り場をかえて糸をたれると、こんどはすぐに、魚がかかった。

これまた、前より大きな赤鯉やった。

甚兵衛が、やっぱり前のように魚を負んで、ざあ、ざあと引きずりながら、土手を上ろうとしたとき、またも川の中から大きなよび声がしてきた。

「おうい、どこへいく。」

「おう、甚兵衛とこや。あしたもどるでなあ。」

と甚兵衛の背中の赤鯉が返事をした。

こんどは甚兵衛もおどろかなんだ。

「この化けものめ。うちに帰ったら、ひどいめにあわしてやるで。」

家にもどると甚兵衛は、いちばん大きな蛇籠に魚を入れ、ふたをしっかりした上に、太い荒な

わでいく重にも、がんじょうにしばっておいた。

ところが、あくる朝、甚兵衛が起きて籠の中を見ると、ふしぎなことに、しばった蛇籠はそのままやったが、中におるはずの魚はどこかに消えておらなんだ。

永井逸風